

鳥取神青通信

第18号

創立45周年記念

発行元・編集
鳥取県神道青年会

鳥神青結成に

想いを馳せて

鳥取県神道青年会

会長 大澤祥之



先ず以て、去る三月十日発生しました「東日本大震災」におきまして被災された皆様、また各神社関係者の方々に謹んでお見舞いとご悔やみ申し上げます。

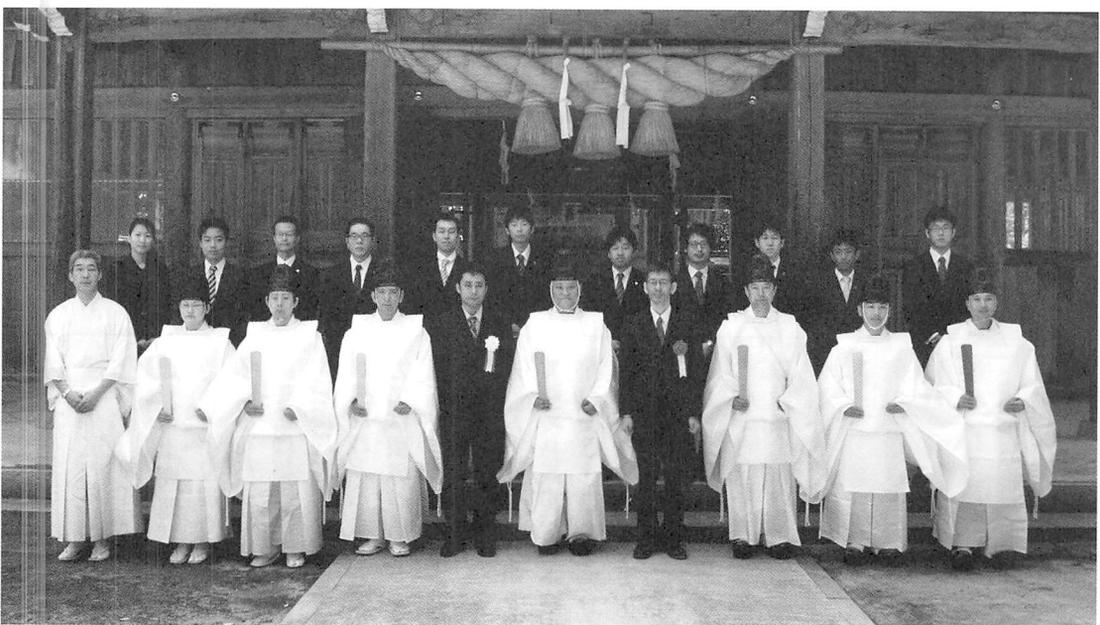
さて、本会は大東亜戦争後愈々経済発展著しい世情の中、昭和三十八年十二月、先輩諸賢の御熱意のもと、国土の再建と神社神道の興隆という高い指標を掲げ結成され、一昨年創立四十五周年の節目の年を迎えました。結成以来、青年神職としての誇りと情熱を以て様々な難題の克服に努め、国家の

為、また斯界の為に、迅速且つ積極果敢な活動を展開してまいりました。また、常に問題意識を有し、会員相互の研鑽と次世代を担う青年神職の育成に努めてまいりました。

去る五月十四日には創立四十五周年記念事業として「奉告祭」を斎行し、結成当時に想いを馳せ、その足跡を顕彰しつつ、惟神の道を二致団結して歩む決意を心ひとつにお祈り致しました。更に同日「実践報告研修会」を開催し、県内の東部・中部・西部の各青年会が現代に抱

える問題や不安を発露し、問題意識の共有とその対策を縷々膝を交え討論致しました。来る創立五十周年の佳節に向け、また次の第六十三回神宮式年遷宮に向けて、会員一同が絆を強固なものにし、斯界の翼を担う力として更なる成熟した組織たるべく邁進してまいります。

私たちは先輩諸兄の大同団結により本会が設立したことを改めて思い起こし、先達の御意志を継承し、我が国の真姿恢復という崇高なる目的を達成する為、一意専心努めてまいりたいと考えます。何卒、より一層の厳しい御教示と温かい御理解を賜りますようお願い申し上げます。



鳥取県神道青年会創立45周年記念奉告祭

於：倉吉市 鎮霊神社

創立四十五周年を祝す

鳥取懸神社廳

廳長 永江則英

鳥取県神道青年会におかれては、創立四十五周年の佳節を迎へられ、去る五月十四日に湯梨浜町で、これの記念事業として実践報告研修会を開催されました。この行事にお招きあづかり、青年神職の方々の飾りない声をつぶさに聞く機会を得たことは私にとつて有意義であつたと思います。

先づは、長い道のりを若い力を結集して辿つて来た四十五年の歩みを心からお祝いします。そして、これからの弛まぬ前進に期待して止みません。

その意味で、今回の記念事業が式典のみではなく、「次世代への継承」を主題とされ、包み隠さない研修会を重点とされたことに対し心から敬意を表します。

今回の研修をステップに、相互の絆を深められ、いよいよのご発展をお祈り致します。

神道青年へ

鳥取懸神社廳

参事 長尾隆久

東日本大震災は人知を超えた大自然の戒めでありますが、この大震災を機に、日本国民はようやく戦後民主主義の悪弊から覚醒し、真剣にこの国のグランドデザインを考え始めたように思えます。しかし国際社会から見れば我が国は未だに内向き志向から抜け出せないでいます。近年の神社ブーム、パワースポットブームはその現れではないかと。

このような世相にあつて、我々神社界に身を置く者の在り方として、殊に青年神職の皆様にも小職の拙い想い

を「つぶやき」としてお示しすることをお許し願いたい。

将来に対しての不安（社家の存続、氏子崇敬者の教化育成、経済面等々）は当然ありますが、神社は二千年以上の信仰に支えられて

いるものが殆どでしょう。その陰には先達の叡智・努力が結集されて今に継承されていることに心を効せば、

理性ばかりではなく「感性」が大切になります。一番の方法は心静かに境内に身を置いて、神々と先達の「声」を聞くこと。神社に係る「慣習・伝統」には地域の必要性から生じたものが多く見られます。そこで疑問を巡らせて下さい。祭式でも行事にも必ずそうする理由が存在します。地域の史跡調査も大変重要です。そこで

神主としての「神道教学」を深めることです。駄洒落も説話もこの基本が無いと氏子崇敬者からの信頼を失いかねます。例えば御祭神

の「神」と「命」の相違（古事記で理解できる）を整理しておく等。そして第六十三回・次期神宮式年遷宮に向けた大きな目標を立て、着実に歩んで戴きたい。益々のご活躍をお祈り致します。

さらなる前進を

鳥取県神道青年会OB

中嶋俊史

鳥取県神道青年会創立四十五周年にあたり、実践報告研修会を開催されたこと、大変意義深く感じました。地域に根ざした実践こそ組織の力になっていくものと思えます。

県神道青年会の上部組織である神道青年全国協議会は昭和二十四年に創立されました。講和条約が締結される二年前のことです。国家の再興を目指し、全国の

青年神道人の大同団結を企図していました。神道の興隆、皇室の尊厳護持、英霊の顕彰、神宮奉賛活動の推進、領土問題、教育問題等々、取り組むべき課題は多岐にわたっていました。

時局は移ろつていくものですが、現在も尚同様の問題が横たわつています。個人の力には限界がありますが、組織で動いていくときに大きな力が湧きあがってくるものです。規模が小さな県ではありますが、本県の潜在力には小さくないものがあると感じています。無理せず気負わず、できることを進めていけばいいのでは、と思つています。今後の更なる発展を祈念しています。

創立四十五周年奉告祭

日時

平成二十三年五月十四日

場所

倉吉市 鎮靈神社

奉告祭奉仕者は次のとおり

齋主 大澤祥之 (県会長)

祭員 池本 靖 (県副会長)

全 永江吉邦 (県副会長)

全 石塚朝久 (県副会長)

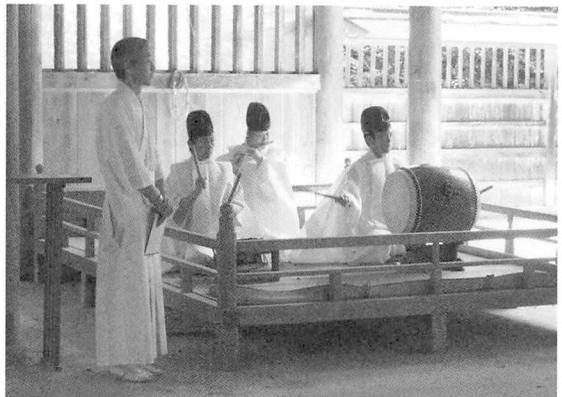
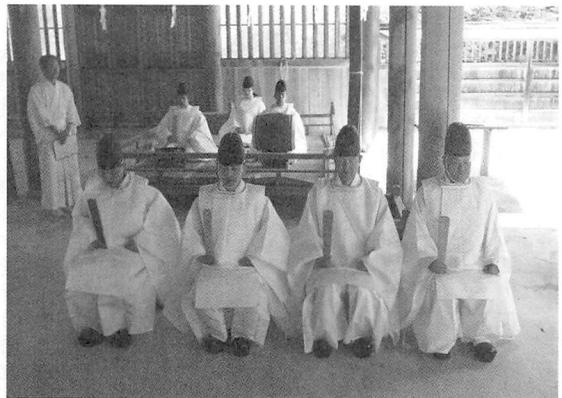
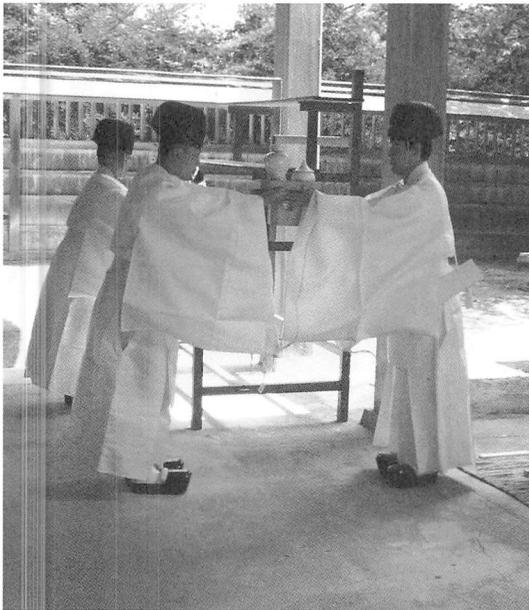
楽人 渡邊香里

全 福田 靖

全 井上雅也

典儀 池田豊具

(中部青年神職会)



記念事業

実践報告研修会

日時

平成二十三年五月十四日

場所

湯梨浜町 羽合温泉羽衣

【主題】

「次世代への継承
青年神職のつづやき」

【講師】

鳥取懸神社 廳長 永江 則英 様
鳥取懸神社 廳 参事 長尾 隆久 様
鳥取県神青会 O B 中嶋 俊史 様

【発表者】

若 葦 会 小田 成範 様
「二十年後の神社と神職」
中部青年神職会 福田 靖 様
「慣例と伝統」
西部青年神職会 来海 紀彦 様
「事業活動の継承」



「次世代への継承」をテーマに、各発表者から神社を取り巻く問題点や対策状況、また活動の歴史が報告され、参加者からは現在抱える苦悩や不安が次々に吐露され、それぞれの事項について講師先生から御助言を賜りつつ、一同が問題意識を共有し、本音を語り連帯感を育む有意義な研修会となりました。特に、次の第六十三回神宮式年遷宮へ向けての取り組みや、国柄や伝統の継承、社家の存続といった近い将来の大きな事柄に対し、青年神職として如何に考え、実践すべきか検討されました。



各テーマごとのグループ討議



青年らしくスライドショーを駆使した発表

研修会に参加して

櫃田脩介(中)

今度の研修会に参加し、最も重要かつ心がけていかなければならない命題は、神社を支えていく社家の存続である。如何に社家を継承していくかについて、子弟交流といった遊びの要素を取り入れた交流の場を提供していくことの大切さも学ばせて頂いた。一層の自己研鑽に努めていきたい。

池本 靖(中)

本研修会では多くのつづやきを聞くことが出来た。我々青年神職の向かうところは不安が山積みで、どの様に取り組んで行けば良いのか? 思いを述べる事で少しは楽になったと感じた。具体的問題点を並べてみて、解決まで至らないが精神的な面に於いて益々の研

鑽が必要であると改めて感じ、考えさせられることが出来た。グループ討議で各々の想いを聞いた事が良かった。「ちゃんと考えているんだな」良き発想の研修会であった。

櫃田康一(西)

研修会には撮影係として協力させていただいた。デジタルカメラ二台で百十五枚の写真撮影した。

客観的に研修会に参加した感想として、大澤会長らしい四十五周年記念事業であったこと、神道青年会会員相互の良い交流の場であったことがあげられる。また、全県の情報交換の場としても、良い研修会であった。これからもこのような研修会が続けられる事を願う。

池田豊具(中)

先ず、鳥取県神道青年会の創立四十五周年を迎えられたことに、喜びと先輩諸賢の功績、尽力に、深く敬意を表するものである。

四十五年の歴史を経て今日がある訳であり、今日の研修の中でもあったように、様々な活動・神社行事の中に問題点があるようだ。それを二つ、少しずつでもクリアしながら、よりよい活動・行事等としていくことが、今を生きる者、伝統を受け継ぎ引き継ぐ者の責務だと思ひ、がんばりましょう!

永江吉邦(若)

同世代の方々との意見交換は、共感、共有できる部分が多く、自身の不安材料が減り、少し明るい展望となった。最も心に残ったことは、神の道は親の道であること。そして、社家の道を

継承していく大きな使命があること。神の前での自分の姿が氏子に伝わること。心して奉仕していきたい。

今岡靖史(西)

鳥取県神道青年会創立四十五周年にあたり厳かなる奉告祭が斎行され、引き続き研修会が執り行われた。初めての形式での研修会であり、自分も含め会員一同不慣れさを感じた。自己研鑽の重要さを改めて実感させられた研修会であった。創立五十周年に向け、本会の益々の発展を祈るものである。

飯田秀篤(若)

当研修会では、県内から二十数名の青年神職が集い、東中西の各グループからの研究発表が行われた。東部若革会では発表に向けて数回の打ち合わせ、討議を行い、当日に向けてよりわかり易

い内容へと変わった。

各グループ共問題意識を持ち、改善への意欲が伺えて、有意義な研修会であった。氏子さんとの関係作りや教化に、苦労や不安があるようだが、その為にも自己研鑽の重要さを改めて感じた。一日一日を大切に、将来へ向けて力強く歩み続けて、神社界を盛り上げて行きたい。

石塚朝久(西)

まず、この様な会に参加出来た事をありがたいたいと思う。各会ともそれぞれ考えさせられる発表を出している。自分自身の環境と照らし合せて参考にさせて頂きたいと思う。当会の活動についても多くの助言や提案を頂いた。これらを会に持ち帰り、今後の活動に生かさせて頂きたい。

研修会に参加して

大澤祥之(若)

本研修会の目的は、日頃感じている不安や葛藤を、飾らず互いに吐露し、皆が危機意識を共有し、連帯感を育む事で、県内全体の融和をはかり、組織として次世代へ向けて確固たる活動が展開出来るようになればと期待し開催した。何れにしても、全てのお社が等しく護持される事を念頭に、今ある現状をしっかりと理解し、「青年神職だからこそ出来る事」を一人一人が常に考え、地道な中にも活発な活動を願うものである。

田中正臣(若)

この度の研修会にあたり、若輩会としては未来、二十年後の神社や神職というテーマで小田君の発表の通り

話し合った。その中で私は、社家の存続という事に関して非常に関心を持った。私

を含め多くの方は、神社の息子に生まれ、知らず知らずの内に神道に触れて生きてきたと思う。全くの一般家庭から神職になっておられる方も沢山おられるが、又その方々とは違った感性が子供の頃にすり込まれている様な気がする。その感覚や知識を自分の子供に伝えていく事は、何れ神職になる、ならないは別として大変重要な事だと感じた。

激動の時代を生きる

我々、現代の神職は「社家のプライド」を持つ事が、日本の神社界存続の鍵を握っている様な気がする。

後藤裕里香(中)

我々のすべきことは何なのか?と考えた時、「世界の為に:」壮大なイメージはあっても、では実際何をやるのかピンとこない。そんな

中、今回の研修会を開催して感じたこと、その答えは

日々の神明奉仕の中にある。兼務神主の多い鳥取県、まして青年神職であれば日々お宮に関わる機会が少ない者も多い。そんな中で各々が自分の考えを持ち、悩んでいる。常に自分を見つめ直していくその姿勢こそがこれから先、自分の道しるべになるのではないだろうか。

来海紀彦(西)

この度の実践報告研修会にあたっては、発表者という大役を担い大変緊張した。会自体も堅苦しい、難しい感じでもなく内容的にも良い会であったと思う。会員同士の意見交換また、情報収集のよい機会であり、何より私自身、勉強させていただいた。ありがとうございます。

渡邊香里(中)

今回、実践報告研修会に参加したことで、皆が自分と同じ悩みを持ち、苦労しながらも懸命に社務に励んでいるのだと分かりとても嬉しく思った。

目まぐるしく流れてゆく世の中で、変える事なく神社を保つてゆく為には神職自身が揺るがない信念を持つてお勤めするべきなのだと思ふを新たにしたい。

岸本航(若)

今回の研修会で、私は半日ではあったが、鎮霊神社での奉告祭で始めて中部の大鼓が聴けて、東部とは違い新鮮な気持ちになった。また、二十年後の神社の未来を考えると不安もあったが、議論を重ねていくうちに、気持ち楽になり実りある研修会となった。

木村裕行(西)

この度の実践報告研修会において、多数の神職が私と同じ様な悩みを持っている事がわかった。普段の青年会では気軽に相談出来る様な内容でもないので不安に思う事もあった為、この様な研修会で皆の意見、対応、心構え等が拝聴でき、心が晴れて明るい気持ちでより一層の神明奉仕に向かえる様な思いた。

金田祐季(若)

私が不安に思っていた項目は「氏子の神社離れ」だったのだが、神社としての関わりだけでなく、地域のコミュニティを通しての関わり方、アプローチの仕方が有る事もわかり、一条の光が見えてきた気がした。

戦後の荒びさめやらぬ中、先輩方が鳥取県神道青年会を立ちあげてより、五年後には早半世紀を迎えようと

している。この間、著しく価値観が多様化し、国の状況は混迷の度を深めている。我々青年神職は先輩方の足跡をどのようにたどり、そしてどのような未来を作るべきか。五十周年に向けて大きな足がかりと自信を得た研修となった。

福田 靖 (中)

実践報告研修会において、中部青年神職会を代表して「慣例と伝統」を発表した。各会員の報告書をまとめ、編集し、プレゼンの準備をする過程で感じた事、それは各社での悩みは自分のそれと共通していることが多いということだ。自己研鑽に励む事とは、他の神職の悩み解決につながるのではと思う。

「伝える」「継承」という言葉が幾度も出てきた。永江庁長が総括されたように「伝える」「継承」と「まず、社家が大切である」という

ポイントは密接にリンクしている。「自分は社家である」という意識と、そこから様々な事をスタートさせる事の重要性を再確認した研修会であった。

井上雅也 (中)

実践報告研修会という事で、若輩、中部、西部青年神職会にて話し合い、実践した事を報告した。若輩は「二十年後の神社と神職」、中部は「慣例と伝統」、西部は「事業活動の継承」という事で、どれも実践された事だけあつてとても共感、勉強になった。

個人のまとめとしては、やはり自分自身を常に見直し、研鑽をするという事が大切だと思う。

門脇聖文 (西)

実践報告研修会に参加して、様々な事業を各会が行っているという事を改めて知っ

た。

我々が親世代(宮司)として、神社を担っていく将来の展望について私は特に考えさせられた。

去る東日本大震災が起り、日本全土で復興の火が立ち上がっている現在は、戦争終戦の時代と似ていると思う。今こそ横の社会ではなく古代から伝えられている縦の社会を人々に思い起こしてもらえようように、私たち神職が常に意識をし、氏子崇敬者に神道の道を正しく伝える事が出来るよう精進したい。

小田成範 (若)

今回の研修会は今までにないもので、若輩会を代表して発表することが出来た事を大変嬉しく思うとともに、有意義であったと感じた。「青年神職のつばき」という副題のもと、会員が普段感じていること、将来への不安をおつけ合い、それ

を共有し、共にどうすべきか考えていく。思うように言葉が出ない事もあったが、研修が終わった今、私には今回楽しかったなと感じられた。また開催されるのであれば、是非参加したいと思う。

前田 伊都岐 (中)

時代が変わり、神主は袴をはいて神社にいただけでなく、氏子の輪の中に入つて共に地域に貢献していくことも大切な事であると再確認した。またその場で少しでも話していく事も今後考えていかなければならない事と感じた。また、常に神主である事を意識し、祭典だけでなく私生活から見直し神主の背中を作つていける様、自己研鑽に努めようと思う。

蘆立信一朗 (西)

周年記念事業、奉告祭、同世代でこの様な形式での研修会、全てが初めての経験で朝から緊張した。どの様な会に参加させて頂いても感じる事だが、今回も閉講式が終わった後には研鑽の不十分さ、新たな課題の発見等で身につまされる思いで一杯だ。若輩会の発表者から奉告のあった、氏子との信頼関係を築くにあたって、神社以外にも氏子の中に入っていくという事は、最近強く思っている事で共感を覚えた。共食儀礼を通じて人と深く関われるようになるのと同じく、このような会に積極的に参加することで、諸先輩の精神の二端でも受け継げるようになったらと思う。

(参加者年長順に掲載)



グループ討議



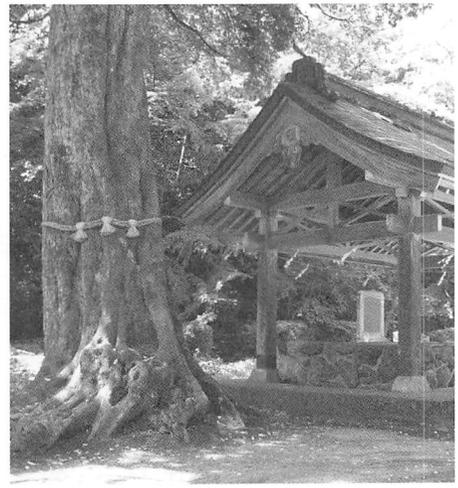
実践奉告研修会



永江庁長より研修会総括



グループ討議



編集後記

今回は創立四十五周年記念号です。「実践報告研修会」、周年事業に何をしようかと考えた時に、旅行に行くより、式典をするより、何か形に残るもの。ということと企画されました。各単位会においてはこのような話をする機会もありますが、今回のように全県下の青年神職が膝を交えて語り合う機会、青年会単独ではなかなかなかった事です。これを機に各単位会の交流も増やして活発に活動をしていただければいいなあ、と思います。

研修会、総会終了後はすつかり引退モードで過しております。年末には第三子出産を控えておりますのでのんびりさせて頂いておりますが、また時期を見て研修会などにも参加したいと思います。今後は子供と一緒に参加できる活動も是非企画していただきたいですね。

(後藤裕里香)